

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第63号 平成21年11月20日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



神戸ビエンナーレ(シンボルコンテナ)

神戸ビエンナーレ

ビエンナーレとは、二年に一度行われる美術展覧会のこと。一八九五年にイタリアで開催されたヴェネチア・ビエンナーレがその始まりです。現在ではブラジルのサンパウロ、韓国の光州など世界各地で行われ、アートの最前線を鑑賞できる国際的な展覧会となっています。

二〇〇七年の第一回では十四万四千人の来場者を記録した「港で出会う芸術祭×神戸ビエンナーレ」。その第二回が今秋十月三日から十一月二十三日にかけて、メリケンパーク、兵庫県立美術館、神戸港、三宮・元町商店街などを会場に開かれました。テーマは「わ wa」。平和、調和、和み、環、輪などを意味します。

今回新たな試みとなる神戸港会場では、海上に作品を展示。メリケンパークとHAT神戸を船で結び、船上から神戸の街と山々を背景に鑑賞します。また、展示スペースに輸送用コンテナを用いるなど、港・神戸らしさが随所に光ります。現代アート、いけばなや書といった伝統的な芸術、園芸を基本とした新しいジャンル「グリーンアート」など、多種多様な、神戸らしい芸術祭になっています。

ハイカラ神戸幻視行―コスモポリタンと美少女の都へ 西秋生(神戸新聞総合出版センター)

大正中期から昭和十年代に至る神戸モダンビズムの時代。稲垣足穂、谷崎潤一郎、中山岩太ら多くの芸術家が神戸で過ごし、街を舞台に、生活を素材に作品を生んだ。神戸との明示がなくても、その背景にはモダンでハイカラな当時のエッセンスがある。

著者は、彼らが神戸という街から純化させたイメージを掬い取る。本書では、その仮構の街の面影を辿ることができる。そこに表れる「神戸」こそが、今なお人々の心を捉えるこの街のイメージの源流となつていのである。同時代を過ごした芸術家たちが、いつかどこかですれ違つていたかも、と空想をかき立てられるのも楽しい。



神戸みんなの大衆食堂―旨い安い早い 街ポケット編集部編(春日出版)

神戸を舞台にした「街ポケットシリーズ」の第三弾。テーマは「大衆食堂」。大衆食堂といえば、和定食や丼ものといった和食が思い浮かぶが、紹介されているお店は、港町神戸らしく国際色豊か。カツを中心とした洋食に、中華、韓国、ベトナム料理まで。おいしそうな写真と食欲をそそる紹介コメントについてチェックしたくなる。胃袋に自信がある人は、巻末の「メガ盛りメニュー」に挑戦してみては？

あじさいを楽しむ―人気の野生種・園芸種150余種と育て方 藤井清

監修(柘の葉書房)

あじさい百五十余種と育て方をカラー写真で紹介する。六甲山系のヤマアジサイなど、野生種が多数掲載されている。

他に歴史がわかるコラムや自然界での驚くべき変異の実態など、あじさいにまつわる情報も満載。あじさいを楽しみ、知り尽くす一冊だ。

鑑賞するなら神戸市立森林植物園はおすすめのスポットの一つ。六甲の名花シチダンカが見られる。

バラード神戸―ゆったり優しいメモリーの神戸恋歌 短編小説集 田中良平(ドメス出版)

五つの短編からなる小説集。舞台は、メリケン波止場、御影の個人美術館、トアロードのバー、三宮センター街の老舗喫茶店、オリエンタルホテル、といういずれもハイカラ神戸の香り漂う場所である。

登場人物たちは、戦争をくぐりぬけ、戦後の復興を担い、そして阪神・淡路大震災を経験した世代。神戸の盛衰を、身をもって知る人々である。物語のあちこちに、街の歴史や実在する人物が散りばめられ、主人公の人生に光と影を添える。

一冊まるごとが、神戸という街に恋をした人々(著者を含め)が奏でる賛歌のように感じられる。

神戸真珠物語 神戸真珠物語制作委員会編(尾川議題)

意外と知られていないが、真珠は、神戸の地産産業のひとつである。日本で真珠の養殖が始まると、神戸は真珠の集荷地となり、やがて、加工や輸出へと発展していく。真珠業の発展は、港と関係が深い。神戸の地形や風土も、真珠の選別には適していたのである。

本書は、真珠業界とかかわりのある十八人が、神戸と真珠について語ったもの。真珠を愛する人々の熱い思いが詰まった一冊。

友愛の政治経済学 賀川豊彦著 野尻武敏監修(日本生活協同組合連合会出版部)

この本の原書は賀川豊彦が全米で行った講演旅行の講演をまとめたもので、一九三六年にアメリカで出版された。以後、十七ヶ国語、二十五ヶ国で出版されたが、日本では出版されていなかった。

神戸に生まれ徳島で育った賀川が、神戸で救貧活動を始めてから今年が百年目に当たり、その記念に邦訳・出版された。ノーベル平和賞候補にもなった彼の社会観を包括的・体系的に示す著作である。



兵庫県知事の阪神・淡路大震災―15年の記録 貝原俊民（丸善）

震災から十五年。多くの対策の成否も客観的にみえてきた今、当時の兵庫県知事であった著者が阪神・淡路大震災を総括した。

「災害対策」と「復興対策」の二編から構成。自衛隊派遣要請の経緯や、政府主導ではなく現地主導での「創造的復興」体制の取組みなど、当時を振り返る。

また、震災の教訓を基本とした災害時の自衛隊のあり方や復興法体系の整備など、今後の災害対策について、広い視野からの提言が、随所に盛り込まれている。

震災直後から、復旧、復興対策の過程において、どのように考え対応したか、反省や悲しみ、感謝など、率直な思いが綴られている。



水損史料を救う―風水害からの歴史資料保全 松下正和 河野未央編 (岩田書院)

震災を契機に誕生したボランティア団体「史料ネット」が行った、平成十六年に但馬・丹後を襲った水害の被災史料の救済記録である。

水損史料はカビが発生し、応急措置が遅れると廃棄される公算が高い。本書は史料修復マニュアルも掲載し、水害時の備えになる。

平時から史料の所在確認や啓発、地域史研究団体・自治体との相互協力体制を築く必要性も説き、史料を散逸させない努力を提言する。

風見鶏謎解きの旅 広瀬毅彦 (神戸新聞総合出版センター)

神戸の異人館といえば、「風見鶏の館」が有名だ。しかし、最初の所有者であるドイツ人貿易商トーマス家については、ほとんど知られていない。著者は、子孫を探し出し、丹念な取材を行った。

「風見鶏の館」の建築年代の謎を解く旅は、ドイツから設計者デラランデの生誕地・ポーランドへと辿り着く。徹底した調査により、明らかになった真実とは。

|| その他の新刊 ||

告白の海 柏木薫 (編集工房ノア)
住宅復興とコミュニティ 塩崎賢明 (日本経済評論社)

花かぶきの美学 吉田泰巳(淡交社)

神戸山手線建設事業誌―山と海を結ぶ歴史浪漫街道 (阪神高速度道路管理技術センター)

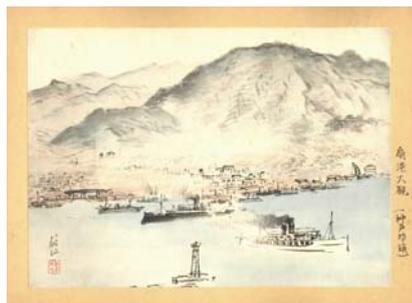
賀川ハル史料集 賀川ハル著 三原容子編 (緑蔭書房)
外科医須磨久善 海堂尊 (講談社)

書庫探訪 その⑱ 『兵庫縣新風景』

福田眉仙は赤穂郡（現在の相生市）に生まれた日本画家ですが、明治の終わりに中国へと渡り、その自然に魅了されました。中国では南宋画や明清画も研究したといわれ、独特の画風が魅力です。

昭和5年（1930）、眉仙は昭和天皇の神戸行幸に際し、絵葉書のデザインを依頼されて兵庫県各地を写生してまわりました。この時、郷土の風景をあらためて見つめた眉仙は、時の流れとともに変化していく景色を書画に残す決意をします。そうして生まれたこの『兵庫縣新風景』には、淡路島や神戸港、摩耶山、播磨灘などの12景が描かれ、墨画に淡彩が施された画面から、自然の荒々しきや大きさ、人々の暮らしが伝わってきます。

日本や中国、韓国を題材に数々の山水風景を描いた眉仙は、昭和38年（1963）に芦屋市の自宅で亡くなりましたが、その作品は湊川神社拝殿の天井絵などでも見ることができます。



『兵庫縣新風景』より 瀬港大観（神戸埠頭）

六甲全山縦走と加藤文太郎

海と山の出合う街神戸。豊かな自然を育む国立公園六甲山では毎年「KOBEM六甲全山縦走大会」が行われています。スピードを競わず、自らの力で歩き通すこと、そして助け合いの精神が尊重される行事です。神戸市が一般市民を対象とする大会を開始したのは、昭和五十年秋。アジア初の万国博覧会が大阪・千里丘陵で開催されてから五年後、日本女子登山隊が女性初のエベレスト頂に成功した年のことでした。完走者は男子一一九五五、女子一〇四人でした。

六甲全山縦走で有名なのが加藤文太郎（一九〇五―一九三六）です。『単独行』（加藤文太郎著）後記によると大正十四年に単独で縦走したとあり、モデルとなった小説『孤高の人』（新田次郎著）では次のように描写されています。

「加藤は生れながらの登山家であつた。彼は日本海に面した美方郡浜坂町に生れ、十五歳のときこの神

戸に来て、昭和十一年の正月、三十一歳で死ぬまで、この神戸にいた。彼はすばらしく足の速い男だつた。彼は二十歳のとき、六時に和田岬の寮を出て塩屋から山に入り、横尾山、高取山、菊水山、再度山、摩耶山、六甲山、石の宝殿、大平山、岩原山、岩倉山、宝塚とおよそ五十キロメートルの縦走路を踏破し、その夜の十一時に和田岬まで歩いて帰つた。全行程およそ百キロメートルを十七時間かけて歩き通したのだ」

彼が生まれた明治三十八年には「日本山岳連盟」が誕生し、探検登山の黄金期が幕を開けようとしていました。大正十年には榎有恒がスイス・アイガー東山稜初登攀に成功し、岩登りと積雪期登山が日本でも本格的に実践されるようになっていきました。

文太郎は、このころから山道や県内の公道を歩き始めたようです。日曜日に歩けるだけ歩き、行き着いた終点を次の日曜日の起点としてリレーのように歩き継ぐ独特な歩き方を考案。地形図と照合し研究しながら隅々まで山野を歩き回り、あらゆる条件を想定して心身の鍛錬を計つたということです。

当時の登山は遠征費をはじめ、山

岳ガイドや装備の費用もかさみ、外国人や上流階級の娯乐的な側面がありました。勤め人であつた彼は、限られた休暇を利用して、但馬や近畿の山々をはじめ北アルプスなどを次々と単独制覇し、世間から「不死身の加藤」「単独行の加藤」として注目を集めました。槍ヶ岳北鎌の冬山で帰らぬ人となつたのは、「単独行」ではない最初で最後の登山でした。



須磨アルプス

登山界の活況を背景に、大正十年ごろの六甲山でも市民登山が隆盛期を迎えようとしていました。

大正十一年「神戸アルプス縦断競走大会」（神戸新聞社）、大正十五年「第一回六甲山脈大縦走」（神戸徒步会）等が企画実施されていきました。

こういった市民の登山愛好は、神戸市が一般市民を対象とする大会を開始した理由の一つです。昭和四十年代後期からの余暇時間の増加に伴い、余暇対策は行政課題となつてき

ました。また、相次いだ水害体験から、レクリエーション活動を通して、災害に対応できる市民、健康を自己管理できる人間を育成する意図もありました。

大会は回を重ねる度に参加者数、知名度が上がる一方、登山道の樹木の損傷、近隣住宅への迷惑、安全対策：と様々な問題が表出しました。検討と試行は繰り返され、現大会の原型が固まつたのは、第十二回。

「国際スポーツ都市宣言」（昭和六十年）を機に大会を外部にも開放し、様々な交流を図るという方向性が打ち出され、参加回数制限を止め、市外参加者の受入を始めたころでした。今年も深まり行く紅葉とともに、大会は四千人の参加者を迎えます。明治期に開発を先導したグループをはじめとする在留外国人、加藤文太郎、幾多の人々が踏みしめてきた六甲山の土。踏みしめる人の数だけドラマを生みながら、山は歴史を刻み続けます。

参考図書

『加藤文太郎の追憶 復刻版』加藤富吉ほか

『六甲全山縦走 25年のあゆみ』神戸市ほか